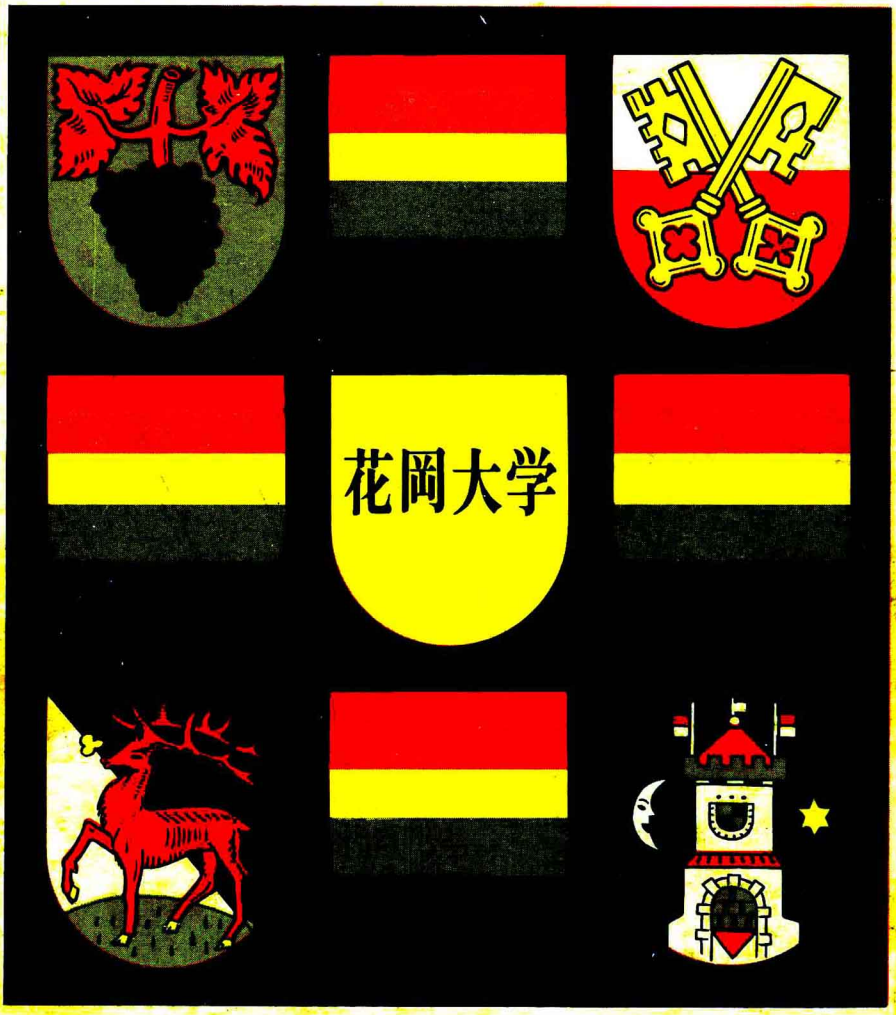
世界のお話 3 こども図書館

シンジュの王



世界のお話3こども図書館

シンジュの玉

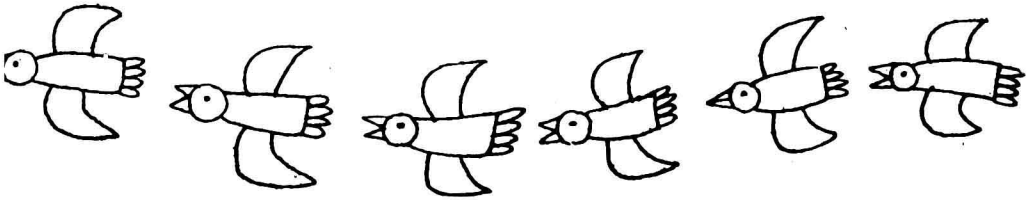
昭和四十三年十二月二五日印刷
昭和四十四年一月一日発行

定価 四五〇円
著者—花岡大学
発行者—横山実
印刷者—上田庄之助
発行所—大阪教育図書株式会社
東京都千代田区神田錦町三の一七
大阪市東住吉区田辺西之町六の四
郵便番号東京—一〇一 大阪—五四六
©1969・花岡大学・上田印刷・堀越製本
落丁本・乱丁本はお取り替えします

シンジュの王

花岡大学

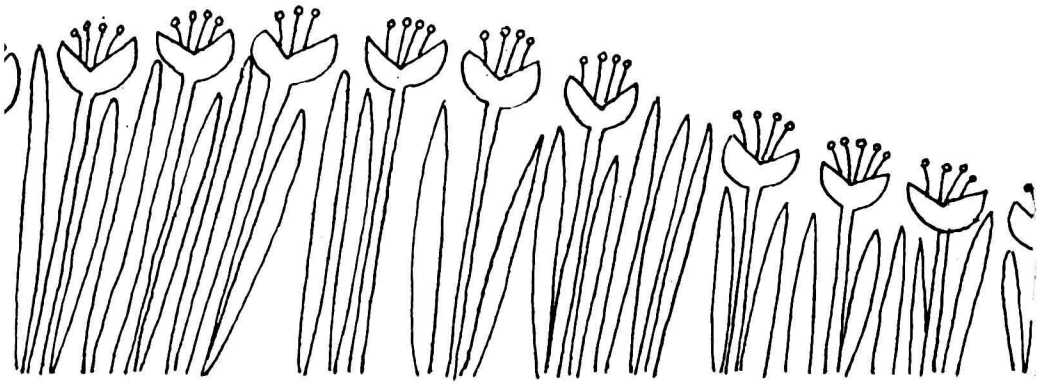
大阪教育図書



はじめに

この本は、名高い世界の童話、民話、神話のなかから、もっともすぐれたお話を、いくつかづつえらびだしてつくったものです。

そのいずれもが、きっと、みなさん方の心をとらえてはなさないでしょう。こどものころに、そういう経験をもつということが、人間を形づくる上に、とても大切なことなのです。読んだあと、おかあさんといっしょに、いろいろと話しあってください。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

童話

星の金貨……九
真夜中の水車……一七
エオとセオのおはなし……二八
ら馬の予言……三六

民話

牛の不平……四五
ミヘルの希望……五二

おぼうさんとどろぼう……六三
裁判官さまの鼻……七一

◇神話◇

黄金のいのしし……九九
ヤマタノオロチ……八六
ロキのわるだくみ……九四
シンジュの玉……一〇一
＊　＊
お話の解説……一一三

■装幀
尼谷義雄

■さしえ
大古尅己
大竹昌夫

童話

星の金貨

まるでおにんぎょうのように、ぱっちりとくろい目の、ちいさな女の子がありました。おとうさんもおかあさんもなくなってしまって、たったひとりっきりでした。だれもかまってくれるものがいません。それではじめは、おうちもありましたが、おうちもなくなってしまいました。

ねるおとこもなくなってしまいました。

あるものは、からだにつけている、いちまいっきりの、そまつなきものだけになりました。でも女の子は、そのぱちっとくろい、きよらかな目のように、どんなにびんぼうになっても、やさしいこころだけは、うしないませんでした。

ある日、女の子は、なさけぶかいしらないおばあさんから、ひときれのパンをめぐんでもら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いました。

女の子はいままで、おなかいっぱいごはんをたべたことがありませんでしたから、たいへんよろこんで、のはらへいきました。

のはらのあたたかいひなたにすわって、ゆっくりそのパンをいただこうと思ったからです。

ところがのはらへいきますと、もういくにちもごはんを食べないで、あしもとがひょろひょろするほどおなかをすかせた、一人の男の人がちかよってきて、

「どうか、おねがいですから、そのパンを、すこしでもわたしにわけていただけませんか、ひもじくて、もう、たおれそうなんです。」

といって、たのみました。

女の子は、自分よりも、もっとおなかをすかせている、その男の人を、とてもきのどくに思いました。

それで、大事なパンを、みんなその人にやってしまって、

「げんきをおだしなさいね！」

と、なぐさめてあげました。

女の子は、のはらから森の方へ、ひとりであるいていきました。
すると、むこうの方から、ひとりの男の子がやってきて、
「ぼく、頭がさむくってしようがないんだよ。ねえ、おねがいだから、なにか、かぶるものをくれませんか。」
と、たのみます。
女の子は、かぶっていた、そまつなぼうしをぬぐと、
「それでは、これでよかったら、かぶってください。あたしはなくったって、べつにさむくもありませんから……。」
と、いってそれを、男の子にやりました。
それからまたすこしいきますと、こんどは上衣もきないで、ぶるぶるふるえながらやってくる、男の子にであいました。
それをみると、女の子は、こえをかけずにいられませんでした。
「もしもし！　あなたは、さむいんでしょう？」
「ええ！　がたがたぶるいなのです。熱があって、からだがかっかしているのに、ふるえて

しかたがありません。」

「それはいけません。じゃ、おまちなさい。わたしはげんきですから、わたしの上衣をあげましょう。女の上衣でへんですけど、でも病気になっては、たいへんですから！」

女の子は、たった一枚しかない上衣をぬいで、男の子にやってしまいました。

女の子は、なおもすすんでいきますと、こんどは、スカートもはいていないみすぼらしいかっこうの、ちいさな女の子にであいました。

その女の子は、ちいさなこえで、

「スカートを、くださいませんか！」

と、そっとたのみます。

それをみると、心のやさしい女の子は、そのちいさな女の子が、かわいそうでなりませんでした。

それで、自分のことはすっかりわすれてしまって、それひとつしかもっていないスカートをぬいで、ちいさな女の子に、やってしまいました。

そのうち、森へつきました。

森へはいったときには、もう、あたりはすっかりくらくなっていました。
女の子は、こんばん、森の中でねむるつもりなんです。
いいねどころになるところはないかと、さがしているうちに、またもや、このさむいのに、なにもきていない一人の男の子と、であいました。
男の子は、
「おねがいですから、シャツ一枚だけ、めぐんでいただけませんか。」
といって、女の子にたのみます。
女の子だって、ぼうしはやったし、上衣はやったし、スカートもやってしまったし、きているシャツだって、一枚きりしかないのです。
でも、どこまでも心のやさしい女の子は、かわいそうな人をみると、自分のことなど、すっかりわすれてしまうのでした。
「そうだ、あたりはまっくらだもの、だれにもみられはしない。シャツを、やってしまったって、いいだろう。」
と、女の子はかんがえました。

それで、

「いいわ、じゃ、このシャツをあげましょう。」

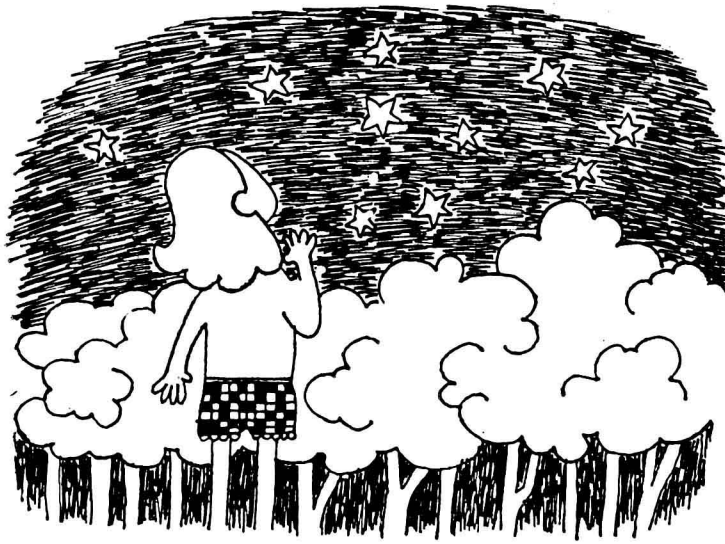
と、いって、シャツもぬいで、やってしまいました。

こうして、女の子は、とうとう、パンツひとつのまるはだかになってしまったのです。

森の上の空には、星がいっぱい光っていました。

そのひかりは、森の中ではだかでぼんやりとつったっているその女の子を、じっとみまもっているかとみえました。

夜になって、さむさがましてきて、はだかの女の子は、ひとりでに、がたがたとふるえ



ていましたが、ふるえながらも女の子は、かわいそうな人たちに、じぶんのもちものをやってしまったことを、ちっともこうかいなどしていませんでした。

いや、かえって、人によろこんでもらったことがうれしくって、おなかのすいたことや、さむいことなど、平気でじっとこらえているのでした。

こんなにきよらかで、美しい心ってあるでしょうか。

すると、そのとき、たいへんなことが、おこったのです。

いままで、空いちめんに、ぴかぴかと光っていた星が、まるでひかりの矢のように、きれいな尾をひきながら、女の子の立っている森をめがけて、雨のようにばらばらっと、ふってきたのでした。

たくさんな星は、女の子の足もといっぱいにふりつもり、ぴかぴか、ぎらぎらと、まばゆいばかりにひかりました。

みるとそれは、どれもこれも、みんなあたらしい金貨ではありませんか。

女の子は、

「あっ！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com